

本の ひろば

[月刊]キリスト教書評誌

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2017年6月1日発行（毎月一回発行）第713号

ISSN 0286-7001

出会い・本・人

オット・カイザー教授との出会い 魯 恩碩

対談書評

E.A.リヴィングストン 編／木寺廉太 訳

『オックスフォード キリスト教辞典』

関川泰寛＋藤原淳賀

エッセイ

『決定版 ひとりの伝道者に注がれた
神のまなざし』を上梓して 錦織博義

本・批評と紹介

H・J・クラウク 著／小河 陽 監訳、吉田 忍・山野貴彦 訳

初期キリスト教の宗教的背景

—古代ギリシア・ローマの宗教世界 上巻

辻 学

フェイス・パウアーズ 著／片山 寛、加藤英治 訳

知的障害者と教会 関田寛雄

R・ランダウ編／野崎卓道 訳

キリストは甦られた 深井智朗

大塚野百合 著

受難と復活の賛美歌ものがたり

宗雪雅幸

エイレナイオス 著／大貫 隆 訳

キリスト教教父著作集2—I

エイレナイオス1 異端反駁I 小高 毅

マルゴット・ケースマン、コンスタンティン・ヴェッガー 著

木戸衛一 訳

なぜ〈平和主義〉にこだわるのか

岡田 仁

本屋さんが選んだお勧めの本

既刊案内

書店案内



6 JUNE
2017

遠藤周作と志をともにし、「日本人とキリスト教」の課題を担った神父の著作選集

第2期 井上洋治著作選集

8

法然 イエスの面影をしのばせる人 風のなかの想い

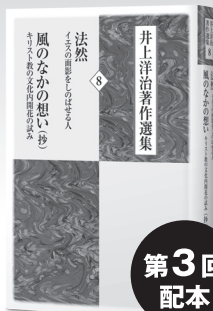
キリスト教の文化内開花の試み 抄

悲愛(アガペー)を生きたイエスの生涯と重なる法然の生涯を描く『法然』と、井上神父のテレズ論、キリスト教の日本文化内開花(インカルチュレーション)のための礎石となる論考6本を『風のなかの想い』より収録。カトリック作家・木崎さと子と、音楽評論家・遠山一行のエッセイも収録。

2017年5月19日刊行予定

◆A5判 上製・248頁・2,700円

山根道公 編・解説
若松英輔 解説



第3回
配本

シリーズ第2期刊行予定 各巻2,700円

第1期全5巻(1〜5巻) 好評発売中! 各巻2,700円

- | | |
|----------------------------------|--------------|
| 6 人はなぜ生きるか／イエスのまなざし ―日本人とキリスト教 抄 | ▶ 好評発売中 |
| 7 まことの自分を生きる／イエスへの旅 | ▶ 好評発売中 |
| 9 南無の心に生きる／イエスをめぐる女性たち 抄 | ▶ 2017年8月刊行 |
| 10 日本人のためのキリスト教入門／井上洋治著作一覧 | ▶ 2017年12月刊行 |

イベントのご案内

日本キリスト教団出版局設立50周年・『讃美歌21』刊行20周年

感謝礼拝・記念講演会 (入場無料) ※要申込み

日時 2017年7月15日(土)
午後1時30分～4時

会場 日本基督教団
富士見町教会
JR「飯田橋駅」西口より徒歩1分

定員 先着300名

◆感謝礼拝.....

説教: 真壁 巖氏 (日本基督教団 相愛教会牧師)
奏楽: 椎名雄一郎氏 (活水学院オルガニスト)

◆記念講演会.....

「希望とは、にもかかわらず愛すること
——三浦綾子の人生と文学」
講師: 森下辰衛氏 (三浦綾子記念文学館特別研究員)

申込み

下記まで氏名・住所・電話番号を添えてお申し込みください。先着順に入場整理券を送付いたします。

日本キリスト教団出版局 出版局50周年記念企画係

■TEL 03-3204-0422 ■FAX 03-3204-0457 ■e-mail eigyou@bp.uccj.or.jp



出会い・本・人

オット・カイザー (Otto Kaiser) 教授との出会い——魯恩碩

今から25年前、ドイツに行くことを決めた。高校生の時、牧師である父の書齋で読んだドイツの神学者たちを生み出したところへ行ってみたかった。慣れないことが多くあちこちぶつかる日々であったが、異なる文化と社会の中で、毎日様々なことを学べることがたまらなく楽しかった。2年間、ヘブライ語、ラテン語、ギリシヤ語などの古代語を勉強し、試験に合格した。ようやく神学専攻科目を受講することが許された。『旧約聖書学基礎ゼミナール』という授業で「本文批評 (Textkritik)」や「編集批評 (Redaktionskritik)」について学んだ時に受けた衝撃は今でも忘れ難い。小さい頃から保守的な長老派教会で育った私にとって、聖書とは神の言葉そのものであり、基本的に神聖不可侵なものであった。当時の私には聖書の写本の相違点を比べながら、より原文に近いテキストを探していくという発想や、正典になる前の段階のテキストを通時的に再現しようとする考えはあまりにも人間中心主義的に見え、一方では新鮮で刺激的であったが、なかなか入り込めない営みであった。聖書が果たして神の言葉なのか人間の言葉なのかという問題は、その後何年も私を考えさせる神学的な問いであった。

その頃、恩師の一人であるオット・カイザー (Otto Kaiser) 教授との出会いがあった。彼とは時々食事を共にする機会が与えられた。カイザー教授は当時すでに世界的な聖書学者であったが、外国人留学生である私をいつも対等な人間として尊重して下さった。今年1月に出版された拙著『旧約文書の成立背景を問う——共存を求めるユダヤ共同体』(日本キリスト教団出版局) に表れている私の旧約聖書理解においても、カイザー教授から与えられた影響の痕跡は至るところに見られると思う。カイザー教授はもともと医学を志望していたが、第二次世界大戦に従軍した経験を通して、人生観や世界観が変わる経験をした。人間の言葉に過ぎないと思っていた聖書が神の言葉に見え始めたのである。次第に神学に興味が沸き、後に聖書学者になったが、彼がそれを悔いたことは一度もなかったと言う。私が覚えているカイザー教授は、旧約聖書学の巨匠である以前に一人の牧師であり、それを誇りに思う人であった。2013年に出版された彼の説教集『Gottes bedürfen ist des Menschen Vollkommenheit (神を必要とすることでは人は完成される)』には、カイザー教授の長年の研究に基づく、広大無辺な聖書学的知識と人文学的洞察を驚くほど短くて平易なテキストの中に濃縮した40の説教が収録されている。時々手にして読む度に、彼の深い学問性に感動を覚えるが、何よりもそこには牧師であり、信仰者である彼の姿が浮かび上がるのである。私はカイザー教授から、聖書は人間の言葉であると同時に神の言葉であること、そして、聖書は人間の言葉を超越してではなく、それを通してその歴史と喜怒哀楽の中で、ようやく神の言葉になりえたとし、今もなりえるということを教えて頂いた気がする。

(ロ・ウンソク＝国際基督教大学上級准教授、千歳船橋教会客員牧師)

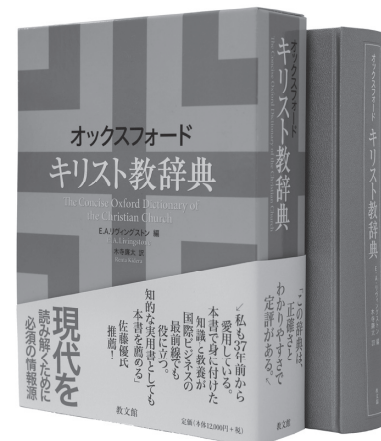
対 談

E.A.リヴィングストン編 木寺廉太訳

『オックスフォード キリスト教辞典』

関川泰寛＋藤原淳賀

司会 高木誠一（教文館出版部）



司会 本日はお忙しい中、お越しいただいてありがとうございます。弊社では一月に『オックスフォード キリスト教辞典』を刊行しました。

出版してすぐに『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』に紹介の記事が掲載されました。ただ、一般紙ですので——キリスト教信仰の有無や教会との関係を問わず——教養としてキリスト教を学ぶ方々に向けた記事でしたので、今回は「教会」という視点、そしてもう少し細かい専門的な角度からお話をうかがえればと思っています。

この辞典のそもそもの成り立ちですが、教父学者のF・L・クロスが編者となつて、一八年もの年月をかけて、一九五七年にオックスフォード大学出版局から、*The Oxford Dictionary of the Christian Church*（以下「親辞典」という一巻ものの大きな辞典の初版が出版されました。大変定評がある辞典で、『キリスト教大事典』（教文館、初版一九六三年）を作る時にかなり活用したと言われています。その簡約版（*The*

Concise Oxford Dictionary of the Christian

Church [1977, 2013³]. 日本語版の原著、以下「子辞典」）が、今回、立教大学名誉教授の木寺廉太先生のご尽力によって邦訳されたわけです。編者のE・A・リヴィングストンは親辞典の第二版以降共同編者となった方です。

情報が凝縮されたハンディな辞典

関川 私がエディンバラ大学の神学部に入つたのが、ちょうど子辞典が刊行された一九七七年です。イギリスで神学の勉強を始めて、教会史の授業も取らなければいけなくなつて、冷や汗たらたらの時にこれが出て、結構使つたんですね。今日も持つてきました。これは初版で、今ではもうかなりボロボロになっています。ですから、神学を学び始めた時にこの原著に出合つたので、非常に懐かしいですね。神学を学び始めると人名も事項もわからないことだらけです。そういうものをまず知るためには非常に好

都合の辞典でした。

藤原 私が持っているのは親辞典です。アメリカでMDiv.をやつていた時に他のキリスト教史の辞典を二つ買い、イギリスのダラム大学に行つた時にこの親辞典を買いました。この親辞典はスタンダードと言いますか、神学を学ぶ人であれば必ず持つていなければいけない辞典なのでよく使っていました。子辞典は今回初めて知りました。が、二つを比べてみて、大きい方がキャデラックとすると、小さい方はカローラみたいな（笑）。

関川 本場にそうですね（笑）。

藤原 日常使いには非常に便利ですね。二、三行で手際よくまとめられている項目もあります。親辞典は重くて、本棚からよっこらしょという感じになるんですね。そうすると、ホコリをかぶることがどうしても多くなる。でもこの子辞典の日本語版だとサツと出せて、簡単に調べられて、これは本当にいいものを出版されたなと思いました。関川 やっぱり手に取つてパツと開けるの

は重要な要素です。親辞典は重いんですよ（笑）。

司会 親辞典と子辞典は大きさは違えど、実は項目数はほとんど変わりません。この子辞典を見た後に、必要であればそれ以上のことを親辞典で調べることができますね。親辞典の方にはその項目を調べるために必要な文献も載せられていますし。

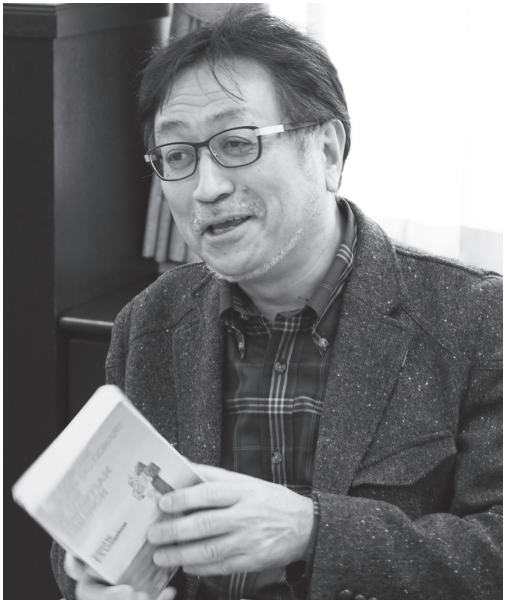
関川 日本語版は文字が非常に見やすいですね。スペースを節約しようと思うと相当に文字を詰める必要がありますが、これは読みやすいというのが第一印象です。

藤原 そういう意味で「今風」ですね。紙質もいいですし、文字も大きくて、ちょっと年を取つてきたわれわれには優しいかな（笑）。

伝統が反映された堅実な編纂

司会 内容をご覧になって、どんなことをお感じになりましたか。

関川 やはりイギリスの辞書作りの伝統が



関川泰寛氏

非常に尊敬されている人でした。おそらく著書はありません。本当に黒子に徹して、こういう辞典や、教父学関係の論集の編集に専心された方です。

司会 親辞典の編者のクロスの著作は、邦訳が一つだけありますね。

関川 昔出た『教父学概説』（日本聖公会出版事業部、一九六九年）

「ウインケンティウス（レランスの）」という人名項目がありますが、この人の名が出ると思わず教会の公同性の指標について出てきます。だからこの人名項目だけあっても不十分で、事項の項目も当然欲しい。『岩波 キリスト教辞典』（岩波書店、二〇〇二年。以下『岩波』）にはありませんが、こちらにはちゃんと出てくる。われわれが教会について考えるときに欠かせないウインケンティウスの基準が、教会史の中でずつと重んじられていることがわかります。

司会 確かに人名だけではなく、「ウインケンティウスの基準」もありますね。

関川 そういう項目が立てられているところに見識が表れている感じがします。あと例えば「ニカイア信条」ですが、実は『岩波』にはないんです。『岩波』では地名の「ニカイア」という項目の中に、公会議の記述があつて、ニカイア信条が出てくる。教会史の視点からすると非常にアンバランスだと思います（笑）。

司会 そういう意味では教会の人たちにと

です。クロスという人は教父学者だけあつて、この辞典でも教父関係の事項、人名の選び方も非常に適切です。「テルトゥリアヌス」にしても、「アタナシオス」にしても、一流の人が書いているというのがよくわかります。あと、親辞典もそうですが、記名の項目じゃないんです。だけど、逆にそれがある共有感を生んでいます。それも特色ですね。

反映されている感じがあります。編者のリヴィングストンは女性の方ですが、彼女は一九九〇年代に教父学会の事務局長をされていました。私も四年に一度オックスフォードで開かれる教父学会に三、四回行きましたが、そこには一〇〇〇人ぐらいの研究者が来ます。その学会のある会に事務局長のリヴィングストンさんが入ってくると、みんなが一斉に拍手した記憶があります。

って安心して勧められる辞典だと。

関川 そう思います。やっぱり「教会」という視点があるということ。特にアングリカンの人が多いでしょうけど、彼らは当然古代教父なり、受け継いできたアングリカンの伝統を重視していますよね。

藤原 日本のキリスト教はアメリカやドイツの影響も大きいですが、イギリスとのつながりが出てくることによってバランスが取れる部分もあるかな、と思います。

最新の内容とバランスのとれた記述

藤原 親辞典は第三版改訂版（二〇〇五年）までしか出ていませんが、子辞典はもっとアップデイトされています。その意味でも必要なものを訳出されたと感じました。

関川 アップデイトされているのはよくわかります。私の専門の古代教父の関連項目をいくつか見ましたが、子辞典の初版から入っている項目でも、今回翻訳された最新版（二〇一三年）ではかなり新しい研究成

果が取り入れられています。短い叙述でも、研究者が読むとそのニュアンスがよく伝わります。署名記事ではありませんが、専門家が書いていることがよくわかります。

例えば「アレイオス主義」という項目に、「従来の学者はこのような教説を異教的哲学への関心によるキリスト教信仰の粗悪化と見なした」と書いてある（五〇頁）。つまりアレイオス主義者というのは、異教哲学に傾斜した古代のキリスト教徒で、結局はキリスト教から離れていったんだと。これは伝統的な理解です。ところが、一九八〇年代頃からこの見方は変わってきました。それ以降、相当多様な研究がなされてきて、「最近論じられるようになったのは、アレイオス主義者たちの主要な目的が御父の神性を御子の神性から区別することであり、それは受肉した御子の限界を彼らが御父のみに帰した完全な神性に帰さない方法で、キリストの受肉を表現するためであった」と。だからアレイオス主義者というのは、ある神学的な、救済論的な意図を持つ

ていたというわけで、単なる異教哲学に傾斜した人たちだとは、もう見ないということです。そういうことが新しい版には非常に明確に書かれているのです。

司会 なるほど。藤原先生はご自分の専門の分野を見ると、いかがですか。

藤原 私は福音派という立場もあつて呼ばれているのかなと思いましたので（笑）、そういう視点からも見てみました。この辞典の良いところは、イギリス人が出していることです。福音派と言えは、根本主義と重なるようなアメリカの福音派や、そのアメリカの強い影響を受けた日本の福音派があります。けれども、イギリスは違います。イギリスの福音派の今のチャンピオンは、日本でも『キリスト教神学入門』（教文館、二〇〇二年）などで知られているアリストアー・マクグラスだと思えますが、彼に聞くと、アングリカンのミニスターの六七％は自分が福音派だと思っているそうです。そういう意味では存在感があるわけです。この辞書ではイギリスの福音派とアメリカの

伝統ですよ。

福音派とをしっかりと分けているので、「あつ、福音派と言っても、いろいろあるんだな」ということがよく分かると思います。

アメリカの神学は、「神の死の神学」などに代表されるように左右にすごく振れます。アメリカはまだ若い国なのでラディカルに動くのに対して、イギリスはヴィア・メディア（中道）の伝統があります。この辞典もそういう意味でバランスが取れている感じがします。

関川 それはかなり重要なこの辞典の性格ですよ。ある神学的項目についても、「旧約・新約でどう言っているか」「キリスト教の歴史でどう言っているか」ということを目配りしながら書いています。これはやはりすごく重要だと思えます。特に初学者がある概念を知ろうと思ったときにはこの点は『岩波』はばらつきが出ていますね（笑）。それに比べると非常にバランスが良く、神学をよく体得した人が書いているという印象を持ちます。

藤原 それはイギリスのキリスト教の良い

豊富な項目数と有機的な構造

関川 神学的な記述は、本文中の*印（アステリスク）のついた項目に飛ぶことで、たどっていきますね。一つの項目だけでは完結しないというわけです。例えば「アルミニウス主義」なんて語は、初学者はあまり聞いたことのない横文字ですが、一七世紀辺りの非常に重要な運動です。この辞典ではかなり丁寧に説明されていますが、そこからさらにたどって、古代の「ペラギウス主義」や「ソツワイニ主義」、一七世紀の「ドルトレヒト会議」などが拾えます。関連項目と非常に有機的なつながりがあるのも、この辞典の長所だと思います。

藤原 あとイギリス人の名前がきちんと入っています。アイザック・ワッツ（賛美歌作者）とかJ・B・ライトフット（聖書学者）などの名前が挙げられているのを見ると、やはりイギリスの辞典らしいという感

じがします。

関川 人物は相当細かく拾っていますよね。だからトータルで約六〇〇〇項目もある。改訂されているから「マザー・テレサ」も出ています。最近亡くなった方まで人物を拾っているというのがよくわかります。

藤原 マザー・テレサは既に「聖人」として出ていましたよね。

関川 それからあとは、アウグスティヌスやトマス・アクィナスなど非常に重要な歴史的人物。この人たちについては生涯、著作、神学も書かれています。だから「アウグスティヌス」の項目を読むと、簡単な生涯のほか、ドナティスト論争（「ドナトゥス派」、ペラギウス論争（ペラギウス主義）などもたどることができるわけです。一つの項目から、二倍も三倍も内容が充実したものになる読み方ができると思います。

司会 アステリスクが付いている項目を見てください、相当知識は広がりますよね。関川 それがコンパクトであるということの魅力です。何巻本にもなっていると、こ

れがなかなか面倒です。手軽に探せるというのがいいと思います。

一人による訳業が生む読みやすさ

司会 この辞典の特徴の一つは、木寺先生が、お一人で訳されたことです。これだけの分量を毎日コツコツと翻訳されて、六年余りで仕上げられました。



藤原淳賀氏

日本語への翻訳で難しかったのは、固有名詞の固定化でした。翻訳は、まずこの英単語に対してどの訳語を当てるかということから始められたそうです。訳者序文にも、「訳者はキリスト教用語の標準的な日本語の訳語が定着していくことに本辞典も貢献できればと強く願っている」という思いが記されています。そのためにも、木寺先生はかなりの数の辞典・事典・文献を渉猟されながら、一番的確な訳語を選んでおられました。

ただ、教派ごとの用語の違いが出てくることはどうしても仕方がないことなので、そういう場合には括弧に入れて「他教派ではこう読む可能性もある」ということを示しておられます。

関川 お一人で訳したメリットはすごく出ているように思います。安定した訳語があって、文体があります。とても読みやすいですね。ネットサーフィンならぬ「辞書サーフィン」をする際に、同じ訳者であるのは非常にいい。訳語の選択も一人ですから、全体の整合性も出てきます。

藤原 これは大変なお仕事で、本当に心から敬意を表したいと思います。自分がやるとしたら、大学院生などにそういう作業をやってもらわないと、到底できないと思います。これはもう職人技ですよ。

関川 よく問題になる Sacrament は片仮名で「サクラメント」としたんですね。

司会 そうです。ただ、その横に括弧に入れて、「秘跡、聖礼典、聖餐、機密」など、各教派で使われている言葉も加えてあります。

辞典の付録として、「欧文・和文項目対照表」が付いています。英文学や西洋史の分野でも、必ずキリスト教用語が出てきます。そのときに「キリスト教小英和辞典」

としても使えるように、と木寺先生は考えておられました。

関川 これは実際に使うと非常に便利ですね。

これからの辞典に求められるもの

藤原 いろいろな国のキリスト教についての項目がありますね。「ロシアのキリスト教」とか「ミャンマーのキリスト教」とか。関川 「中国のキリスト教」もありますね。しかも最近の改訂で、プロテスタント約三五〇〇万、カトリック約一〇〇〇万と人数まで入っています。成長している中国のクリスチャンの数も意識して書いていますね。あと、「日本のキリスト教」も項目にありますし、「遠藤周作」と「賀川豊彦」も載っています。

司会 実は木寺先生には最初、第二版改訂版を訳していただいていたところ。ところが訳稿ができあがった段階で第三版が刊行されていることに気づいたんです。そこで、

新項目を訳されたり、増補されている項目を訳し直されたのですが、その中で新しく増えていたのはやはり、アジアとアフリカに関する内容でした。

関川 辞典としてバランスを取っていくとなれば、今はキリスト教の中心がかなりシフトしているから、そういう項目は増えてもいいでしょうね。

今度は日本の研究者が執筆する辞典ができればいいですね。ただ、どういうふうにバランスを取るか、辞典によってかなり違いがある。掘り出し物の項目があるけれどもそうでない項目もある、玉石混淆の辞書もあるわけですね。やっぱり良い辞書というのは安定感があるし、私はそういう辞書を求めます。スタンダードだけれども信頼できるという。ただ、イギリスは研究者の層が厚いのでできますが、日本でそれができるかといえば、難しいと思います。

司会 辞典の「安定感」というのは具体的にはどういうところでしょうか。

関川 単純な価値判断が入らない辞書がい

はアフリカンミッションをやっていますので、今はアフリカのキリスト教指導者のかなり多くがアングリカン関係の人です。

関川 おそらく中国のキリスト教はこれからもどんどん伸びるでしょう。人によっては「すでにキリスト者の数は一億人ぐらいはいる」とも言っています。これは大変な数です。オフィシャルなキリスト教はもちろん存在するわけですが、かつて「家の教会」「地下教会」とも呼ばれた、いわゆる「自由教会」の勢力も増えています。それは地域によって中国政府の弾圧を受けていますが、そういうキリスト教をどう判断するか、その力量をわれわれは持たなくては いけません。これは日本の知識人も知らないといけないわけで、そういうときに役立つ項目が欲しいですね。

あと、この辞典には倫理的な項目が加わっていますね。「同性愛」の項目など、二〇〇〇年以降の教会の態度も反映していますね。

藤原 この辞典のコンテンツは基本的にイ

いですね。この辞典には入っていませんが、『岩波』の「悪霊」の項目は、その記述がかなり非神話化されている。そうすると、例えば神学の歴史で、悪霊を追放するということがブルームハルトの父親によって行われて、バルト神学にすごい大きな影響を与えていくことが、あまり意味をなさなくなってしまう。悪霊というのは古代人が病気の原因をそれに帰したものにすぎないという理解で書かれてしまうと、すごく残念な感じがしてしまいます。

藤原 安定ということ言うと、何世代か経って、何度もフィルターにかけられる中で受け入れられていくことが必要になるでしょう。ですから、日本でもし辞典を作るとなると、こういう定評のある辞典を基盤にしなが、欠けているものを加えていく、あるいは修正していく。特にアジア、アフリカの神学、キリスト教についての記述は必要だと思います。われわれはどうしてもキリスト教の先進国として、欧米をずっと見てきましたから。アングリカンの人たちが

なかなか大変な努力がいることは間違いないですが。それにリヴィングストンはずっと関わっていたわけです。そういう人が欲しい(笑)。

あとはヨーロッパなどでは、それぞれの分野で辞典を出しているわけです。初期キリスト教の辞典だけでも複数ありますし、宗教改革もそうです。だから、そういう可能性が出てくれないと思いますね。

司会 本日はどうもありがとうございます。

(せきかわ・やすひろ＝東京神学大学教授)
(ふじわら・あつよし＝青山学院大学教授)
(A5判・函入・一〇一八頁・
本体二二、〇〇〇円＋税・教文館)

重荷でない奉仕があるか？

『決定版 ひとりの伝道者に注がれた神のまなざし』

を上梓して



錦織 博義

今新入社員が入社し、新入生が入学し、どここの家庭でも、あわただしい時期だと思います。

我が家も一九六八年四月に大坂から東京江東区木場の教会に転任してきました。ちょうど長男が一年生に入学するときでした。登校する時は近所の上級生と一緒にですが、帰りは一人です。親は当然帰ってくると待っているのですが、(当時の木場は橋が多く、どの橋が分からないのです)一向に帰ってこないのです。そこは、近所に証しを立てられていた『耶穌の材木屋』川京商店がありました。迷っているのを知った人が「君どこの子?」「ぼくのうちは教会なの!」「川京さんだ!」というところで、川京商店に電話があり、店の方が連れて帰って来て下さったことがあります。そんなことが二度ありました。

転任となると当然のことながら、前任の牧師とは違うわけです。特に若い人は比較するのです。しかし、そんな時、神さまは助け手を備えていてくれました。どのように……。

東京に赴任する牧師は、教団本部の雑用もさせられるわけだ。

ある時、大先輩の牧師がおいでになり、事務局で奉仕をしてほしいという要請でした。即座に「事務なんかやったことありませんし、それにそれは私には重荷ですよ」と断ると、それまで穏やかな顔をしておられた先生が、急にきりつとした顔をして「君、主のご用に重荷でないものなんかないんだよ。楽な主のご用があるかい、あったら教えてくれよ」と諭すように言われた。七〇歳を過ぎた大先輩の先生が、三〇代半ばの青二才に頭を下げて頼まれたのには、参った。パソコンはもろんワープロもない時代だ。それでも二〇年仕えさせていただきました。

そんな中で、私たちにも四人の男の子が与えられました。前任地は、教会堂というようなものではなく、講壇の裏が牧師館(?)。どんなに小さい子どもでも泣かれたら困るのです。そこは「牧師の知恵?」その結果は?

教会も地域とは無縁ではありません。地域のマンション建設問題と二〇年にわたって戦うことになりました。牧師が鉢巻しながら……。しかし、みな益に!

そんな中でも、「私にできることはありませんか?」と言って下さるかたが出て来たのです。その結果、救われる者が……神のなさることは実に不思議です。

神は生きておられます。無学の只人にも恵みを与えて下さいます。私たちの努力の尽きた時、神の方から働いて下さるのです。それは今も変わらないことを証したかったのです。

東京は下町での四六年は「宝の山・恵みの山」でした。

(にしこ)り・ひろよし 元・木場深川キリスト教伝道師(隠退牧師)
(新書判・二七八頁・本体一一〇〇円+税・ヨベル)



牧師の子どもでも、なかなか期待されているようにはいかないのです。そんな中で生まれた「哲学?」、すさまじい喧嘩!どうするオヤジ!

誰だって、自分の子が一番だ!そうでなければ、子どもは育たない。運動会でも行つてごらん。皆自分の子どもに目が行く、カメラもビデオも「わが子」なのです。牧師だって同じです。その子が壊れたら……。私たち夫婦は二人とも音楽には全く音痴。ブラームスもベートーベンも同じ。始末に負えない。その親の子に音楽の好きな子が……。さあ大変!

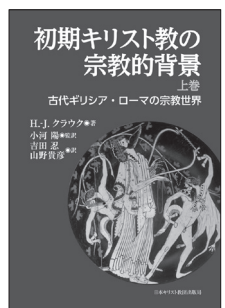
なかなか他人のことは分からないものです。それが外国の人だとなかなか理解に苦しみます。ある時、アメリカの大学生が休暇を利用して日本に英会話を通して伝道したいという。何年間か迎えました。言葉は文化です。全く違うのです。今とは違い数十年前の事。戸惑ったこと、感激したことなど……。

そんな中で米国の青年たちとの交流……英語のできない牧師信徒に励まされる牧師。哀れな牧師が今度は四〇日間のブラジル伝道……。サードになる?

新約聖書は、いかなる宗教環境で生まれたのか

小河 陽監訳／吉田 忍・山野貴彦訳
H・J・クラウク著

初期キリスト教の宗教的背景 古代ギリシア・ローマの宗教世界 上巻



辻 学

イエスが生まれた時、「占星術の学者たちが東の方からエルサレムに」来たという（マタイ二・二）。そこで注解書をひもとくと、古代オリエントで占星術が生まれたことや、「占星術の学者」と訳されている「マゴス」という語は、古代ペルシアの祭司階級の人間を意味するが、「魔術師」といった意味合いも持つことなどが書かれている。しかし、新約聖書の時代、イエスや初期のキリスト教徒たちが生きていたヘレニズムの世界における占星術や魔術がどのようなものであったかをさらに調べようと思つたら、どうすれば良いのだろうか。

もちろん、新約聖書の背景となるヘレニズム・ローマ社会についての概説書や、重要な史料をまとめて提供してくれる書物は存在する。ギリシア・ヘレニズム文献から数多くの並行例をドイツ語訳で挙げてくれる *Neuer Weltstein*（右の箇所につづいてIII/2.1, 2013）や、日本語でも、重要な史料を訳出してくれている『ギリシア、ローマ、ユダヤ、エジプトの史料による原典新約時代史』（山本書店、一九七六年）は非常に便利である（ただし入手が難しい）。しかし、占星術や魔術、さらには

奇跡、そして犠牲祭儀や密儀宗教といった、新約聖書と関わりの深い主題ごとに、ギリシア・ローマ世界におけるその実態を、最近の研究状況を踏まえつつ総括的に解説すると共に、いくつかの史料を具体例として示してくれる書物という点で、本書の有用性は極めて高い。

本書は、新約聖書に収められている諸文書が書かれた、すなわち紀元後一―二世紀のキリスト教が広まっていたヘレニズム・ローマ社会にどのような宗教的環境が存在したのかを描き出してくれている。母体であるユダヤ教の枠を超えて広がっていった初期キリスト教の布教対象となった人々が日頃親しんでいた宗教や儀礼はどのようなものだったのか、人々は死後の世界をどうイメージしていたのか、また教会という共同体はどう理解されたのかといった、「伝道」を考える上で欠かせない様々な主題が、具体的な史料を示しながら考察されている。

当時の市民宗教と家庭宗教について述べた第一章に続く第二章では、かつて初期キリスト教の聖礼典や復活理解に不可

欠の背景とされた、ヘレニズム・ローマの密儀宗教が主題になっている。エレウシス、ディオニソス、アッテイス、イシス、ミトラスの祭儀が順に取り上げられているが、キリストの復活を聞かされた人々が、それをどのように理解したかということを（使徒一七・二六以下の物語）考える上で欠かせない知識だと思う。またミトラスの祭儀は、クリスマスをキリスト教が祝うことになった経緯との関係もあり、とりわけ興味深い。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて宗教史学派は、キリスト教の教説を、周辺の宗教的環境からの影響として説明することに力を注いだ。この手法は、歴史的・批判的聖書研究の発展に大きく貢献した一方で、類似している点に影響関係を見出すことに急なあまり、多くの否定的反応をも呼び起こすことになった。その反動の一つが、初期キリスト教の持つ多くの要素を出来る限り旧約・ユダヤ教から説明しようとする傾向である。しかしこれは、「あれか・これか」の問題ではなく、両者が総合的に考察されるべきものであろう。その

意味で、「注意深く、近似性と依存とを区別」（三六頁）しつつ再度ヘレニズム・ローマ的背景を考察していこうとする本書の姿勢は重要であり、学ぶところが多い。

第三章では、占星術や占い、さらに奇跡や魔術が実践されていた様子や、それらを当時の人々がどのように受け止めていたかが描かれており、イエスが実践し、キリスト教が布教の内容とした奇跡行為に対する人々の反応を考える上で示唆に富む。

本書は、原著（ドイツ語）の英訳版を基盤としているが、史料は可能な限り重訳を避け、原文にあたっていているという（三五頁）。正確で有益な翻訳のため多大な労苦を払われた監訳者の小河陽氏と、二人の翻訳者に感謝したい。皇帝崇拜やグノーシスといった、同じく初期キリスト教理解に欠かせない主題を扱っている下巻の出版が大いに待たれる。

（つじ・まなぶ）広島大学大学院総合科学研究科教授
（A5判・三五四頁・本体五〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

西洋音楽研究の大家が
キリシタン期における
西洋音楽伝来の実態をやさしく紹介する

皆川達夫 著

キリシタン音楽入門

洋楽渡来考への手引き

かくれキリシタンが歌い継いだ「歌オラシヨ」をはじめ、幻の「キリシタン音楽」の姿を探り続けた西洋音楽研究の大家が書き下ろす、待望の入門書。

四六判・184頁・1728円

皆川達夫の好評既刊

洋楽渡来考
キリシタン音楽の
栄光と挫折
A5判・642頁・19,440円

洋楽渡来考 再論
箏とキリシタン
との出会い
DVD付
A5判・160頁・6,912円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp（価格8%税込）
<http://bp-uccj.jp>

根本的な問題提起と実践的提言

フェイス・パウアーズ著

片山 寛／加藤英治訳

知的障害者と教会 驚きを与える友人たち



関田寛雄

れる。

イエス・キリストの救いの普遍性を信じ告白する教会にとつて本書は根本的な問題を提起している。即ちキリストの恩寵の供与であるサクラメントをはじめ教会生活の本質的部分に知的障害者（児）がどのように関わり得るのかという問題である。冒頭に訳者のひとりである片山寛氏が「知的障害者の神学に向けて」論議を展開している。障害者の人権は一般に認められているとはいえないものの「彼らの位置がない」のが現実である。相模原市やまゆり園の事件はその事実を最も悲劇的な形で提示している。聖書及び教会の歴史的神学の流れを介してノーマライゼーションの根拠と展開を指向する一文は重要である。

本書の特色は、著者自身が知的障害を負う息子リチャードとの関わりから生まれた全てを描いていることである。第一章「知的障害の状況は変ってきた」において、先ず障害者（児）の教育が「権利として確立された」（二四頁）ことが確認される。一九八〇年代末の英国の状況の反映であるが、この確認は「地域的ケア」の先進的施策へと展開され、何十年も療育院住いであつた人々が「地域社会の一員」となりつつある事実が証言さ

第二章「教会へのチャレンジ」において著者は、教会においても一般世間と同じく障害者（児）について「偏見や先入観から免れているわけではない」（二三頁）ことを指摘し、地域的エゴイズムが障害者（児）を排除する傾向に対して教会は明確な姿勢をとるべきであり、また教会内においてしばしば示される同情から来る「親切がとてつらいことがある」（五三頁）と著者は率直に語る。それとの関連で障害者（児）の家族の立場からの発言とそれに対応する家族たちへの関わりの重要性が、実に豊富な実例を挙げて語られる箇所はまことに説得的であり、特別に注目が求められる。

第三章「教会のニューフェイス」では障害者（児）と教会との具体的関係の種々相が語られる。障害者（児）が教会に受け入れられる時にその家族が教会生活に深く関わっていることが大切な契機となり得る。同時に家族としては教会に様々な形で「迷惑」をかけるのではないかと心配を、教会員こそが分かち合うことで家族を励まし、かくて共に守る礼拝となるのである。

いる。

第六章「かれらは教会のために何ができるか？」と問うているが、著者は彼らが与えられている賜物の豊かさについて積極的に語り、特に教会共同体にもたらす新しい交わりへの障害者（児）の貢献が述べられる。要は教会自体の有り方が問われているのである。「残されたのは教会それ自体しかないのだ」（二一三頁）。

巻末の「解説」における加藤英治氏の本書の紹介、並びにその後の英国の状況と共に述べられる「日本の社会および教会」における「キリストにある有効な『対抗文化』」の創造への提言（二四九頁）は、全キリスト教会が聴くべき貴重な言葉である。

（せきた・ひろお）日本基督教団神奈川教区巡回牧師
（四六判・二五〇頁・本体一八〇〇円＋税・新教出版社）



大崎節郎著作集

第一巻 教義学論文集1（全7巻）

大崎節郎
Setsuro Osaki



透徹した教義学的営為によって
なされた業績を集大成！

第一巻は渾身の書き下ろし
「使徒信条講解（教義学要綱）」

その詳細な講解は、教義の根本
となる重要事項の詳述でもある。

菊判・上製・函入
定価【本体6,000＋税】円
ISBN978-4-86325-082-6



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

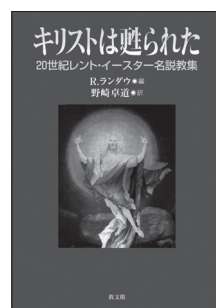
罪の赦しと永遠の命がここに！
R・ランダウ編
野崎卓道訳

キリストは甦られた

二〇世紀レント・イースター名説教集

数年前にミュンヘンでイースターの朝の礼拝に出席したことを思い出す。まだ寒い、暗い礼拝堂で、祈りが捧げられ、オルガンとチェロの演奏が始まった。それが終わった頃、会堂に朝陽がさし込んで、少し明るくなり、沈黙の中で、牧師が「キリストは甦られた」と二度大きな声で宣言し、いつもの礼拝が始まった。

礼拝中ではなく、一日中「キリストは甦られた」と宣言した牧師の言葉が心を支配していた。この出来事のリアリティーがイースターだけではなく、すべての礼拝を支配していなければならないはずだ。私たちはイースターの礼拝で、魂の永劫回帰、今年も変わらずやってくる春に自然の力を感ずること、人生の新しい始まりや人間の不屈の精神を語るのではない。また受難日と切り離された空虚な喜びを語るのではない。「キリストは甦られた」ことのリアリティーを語るのである。ルードルフ・ランダウが編集したレントからイースターまでの教会暦を意識した説教選集を読みながらその日のことを思い出した。



深井智朗

本書は数年前に出版された『光の降誕祭——二〇世紀クリスマス名説教集』の続編で、レントからイースターへと歩むキリスト者の敬虔を養ってくれる。日本ではあまりなじみのない教会暦に沿って、その日にふさわしい説教を選んで、訳者はそのことを読み取って毎日曜日につけられた呼び名を丁寧に解説してくれているので、レントからイースターへと向かうそれぞれの日曜日を教会がどのように守ってきたかを知ることができる。

編者は禁欲的で多くを語らないのだが、本書の原題の副題が「受難と復活についての説教と絵画」となっているように、教会暦と説教の間に挿入された何枚かの絵画によって編集の意図を語っている。ランダウの仕事は、裏表紙に印刷されたグリユーネヴァルトのイーゼンハイムの祭壇画に描かれているバプテスマのヨハネの指のようだ。編者は十字架につけられ復活された主イエス・キリストのリアリティーを指し示す「指」に徹している。

バルトやトゥルンアイゼン、イーヴァント、ボーデルシュ

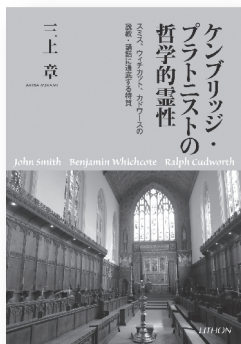
ピングなど前世紀前半の神学者や牧師、またユンゲル、シュタイガー、ザウターなど前世紀後半に活躍した神学者、さらに日本でもよく知られた聖書学者たちの説教が選ばれている。もう何度も読んだことのある説教であるが、訳者の新鮮で美しい翻訳を通して改めて教えられる。バルトはこう語る。「イースターを祝うとは、神が聖金曜日になされたことの中で神が語られた然りと否とを聞き取ることです。すなわち私たちすべての者に対する然りと、私たちが神から離れた状態——それが私たちの惨めさです——に対する否とを聞き取ることです」(二五六頁)。

しかし編者はこれまで印刷され、説教集などにまとめられることのなかった説教も紹介してくれている。ゲオルク・メルツの説教を初めて読んだ。メルツはバルトやゴッタルテンと共に神学雑誌『時の間』の編集同人であり、バルトの『ローマ書注解』の意義を見出した人物であり、クリスティアン・カイザー社のアルプレヒト・レンプの盟友で、編集顧問

でもあった。彼の神学は教会的な伝統からはかなり自由なものであった。彼が洗足木曜日の説教は、聖書的で、伝統的で「キリストにならう」真実を雄弁に語るものであった。メルツが洗足木曜日のために選んだ聖書の箇所は詩編二三篇で、彼は「この世の人々から見れば、敗北の交わりであった食事が勝利の聖礼典になった」(二六〇頁) 奇跡、あるいは秘儀について語る。

自らも説教者である訳者が、丁寧言葉を選び、読みやすい日本語に訳してくださった本書は、説教の準備を助け、神学的な思索の手引きになるはずであるが、そのような利用法に終わってはならないはずだ。私たちキリスト者が、「キリストは甦られた」という私たちの信仰のリアリティーへと立ち返るため、何度でも「信仰の読書」を繰り返すために用意された宝のような一冊である。

(ふかい・ともあき) 東洋英和女学院大学人間科学部教授
(四六判・三五六頁・本体三二〇円＋税・教文館)



ケンブリッジ・プラトニストの哲学的霊性

スミス、ウィチカット、カドワースの説教・講話
に通底する特質

三上 章 著

●A5判上製 本体4,000円＋税

「どうしたら、聴く人にわかる言葉で心に通じる説教をすることができるか」という課題のもとに、17世紀のケンブリッジ・エマニュエル学寮出身の神学者三人の思想を取り上げ、共通する発想をギリシャ哲学原典をふまえて明らかにする。

ISBN978-4-86376-055-4

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

主の受難と復活の賛美歌を書いた人々の生涯
大塚野百合著

受難と復活の賛美歌ものがたり



宗雪雅幸

私たちが賛美歌を歌うとき、それは信仰の告白をしていることに他ならないことに気づく。神への賛美、自らの罪の告白、神への願い祈りを賛美歌を歌うことで折っている。

賛美歌は私たちの心を捉えてやまない。この賛美歌をつくり私たちの祈りを最高潮に導いてくれる人々を描いたこの書物をひもとくとき、著者の綿密で縦横な調査に感動する。賛美歌作詞家、作曲家の生い立ち、時代背景、生涯を綿密に俯瞰する。また賛美歌歌詞の元の詩を「私訳」という形で忠実にその内容を示してくれる。私訳は翻訳された詩の元の心をより詳細に深く掘り下げたもので私たちの賛美歌理解に極めて有益である。

二〇一七年一月三十一日は、マルティン・ルターがヴィッテンベルク城教会の扉に『九十五箇条の提題』を掲げてから丁度五〇〇年に当たる記念すべき時である。一般に「宗教改革」と呼ばれるルターの行動は当時のローマ・カトリック教会の腐敗を弾劾することにとどまらず「神の義」とは何か、「信仰によって義と認められる」とは何かを問う根源的な問いであった。ルターは破門されるが屈することなく、それまでラテン語訳

しかなかった聖書をドイツ語に翻訳して出版する。その数十年前に発明されたグーテンベルク印刷機が使われた。そしてルターのもう一つの偉大な功績は会衆が歌える賛美歌を数多く作ったことだ。今も広く歌われる讃美歌二六七番「神はわがやぐら」は特に名高い。聖書が自分の国の言葉で読めるようになったこと、賛美歌を自分たちの言葉で親しみのある曲で歌えるようになった扉を開いたのがマルティン・ルターであった。

著者は生き生きとその詳細を知らせてくれる。キリスト教は真に民衆のものとなった。

その後の賛美歌の発展は目覚ましい。著者は英語賛美歌、米国での発展、テゼ共同体賛美歌、アフリカの賛美歌等について詳細に解説し私たちの目を開かせてくれる。中でも米国のフアン・クロスビーという目の見えない女性賛美歌作詞者の紹介に胸を打たれる。娘が生まれつき一生目が見えないと絶望する母に、ファニーの祖母が言う。

「あなたが祈り求めているものを神があなたに与えることを望まれないのなら、祈りが聞かれないというのが、

あなたにとって最善なことですよ」。

この祖母の信仰があつて、ファニーは一〇歳になる前には毎週聖書を暗記する。そして賛美歌作家となる。九五年の生涯に約八千もの賛美歌歌詞を書いたという。代表作は讃美歌四九五番「イエスよ、この身を ゆかせたまえ」。

著者の大塚野百合さんは米国クラーク大学留学、イエール大学神学部の研究員を務め、恵泉女学園短大、同大学で教授として西洋史、英語、英文学を担当した。現在名誉教授。分かりやすく親しみやすい、それでいて深い洞察力に基づく「感動に満ちた」キリスト教書籍を数多く刊行するなど優れた啓蒙活動の功績によって二〇〇四年には「キリスト教功労者」を受賞。数度にわたるガンを克服し、九〇歳を超えてなお、キリスト教講座、講演を精力的にこなしている。二時間の講演を全く原稿を見ずほとんど立ち放しでこなす。賛美歌を歌うアルトの声が美

大塚野百合さんはまさに「開花」真つ最中である。探究心に溢れ、世を憂い、今こそ新たな「宗教改革」が必要であると力説する。次の著作を期待したい。

(むねゆき・まさゆき) 学校法人恵泉女学園理事長
(四六判・二三六頁・本体二四〇〇円＋税・教文館)

焚き火を囲んで聴く神の物語・対話篇

話題沸騰中！

大塚野百合著



オリジナルソングも誕生した本書。まさに超教派の面々による神という巨像「焚き火を囲む仲間」と多に語り明かした画期的な大塚野百合！抱腹な読む神学書！「対話」大塚野／高橋秀典／水谷潔／久下倫生／中村佐知／山崎ランサム／川向肇／豊田信行／上沼昌雄／吉川直美／古川和男／大塚太郎／久保木聡／解題・祝辞・応援 谷口和一郎／平野克己／岩瀬まこと／小沢春夫／マリア松島純子／大嶋重徳／小平恵 月刊『舟の右側』連載を元にした書下し対話篇！ ●四六判・三三八頁・本体二五〇〇円＋税

焚き火を囲んで聴く神の物語・対話篇 リンク集 鋭意準備中
<https://takiblinks.wordpress.com/>

大塚野百合の本

聖書は物語る ― 年12回で聖書を読む本 ●4版 一〇〇〇円

聖書はさらに物語る ― 年12回で聖書を読む本 ●再版 一〇〇〇円

『近刊』マイケル・ロダール／大塚野 一訳 7月上旬刊予定 ●ミネル新書定価二四〇〇円

神の物語上・下



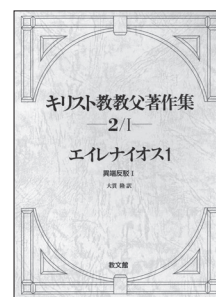
話題沸騰中！

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
お問合せは info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
＊自費出版の専門出版社＊資料・星

グノーシス主義についての最重要証言
エイレナイオス著
大貫隆訳

キリスト教教父著作集2—I

エイレナイオス1 異端反駁I



小高 毅

エイレナイオスの主著はグノーシス主義を反駁する『異端反駁』であるが、ほかにも二つの論争にかかわったことをエウセビオスの『教会史』は伝えている。

一つはモンタヌス派の問題である。当時リヨンにも広がっていたこの運動が巻き起こした問題を平和裏に解決するためにローマに派遣されている。これは一一七/一一八年のことである。もう一つは、復活祭をめぐる論争である。ニサンの月の十四日に祝うとするアジアの司教たちに対して、主日に移して祝うべきであるとするローマの司教ウィクトルは彼らに書簡を書き送り破門を宣言した。エイレナイオスはガリアの司教たちの名のもとに書簡を書き送り、主の復活を祝うのは主日であると主張しつつも、古い慣習を守っている他の諸教会を切り離すことのないように訴えている。この書簡を引用した上で、エウセビオスは次のように述べている。「エイレナイオスは、その名のおりに平和をつくりだす人（エイレノポイオス）だったので、諸教会のためにこの種の勧告をし、その使節として奉仕した」（『教会史』五・二四・18、秦剛平訳）。

そのエイレナイオスが自分には洗練された話術も著作の能力もないし、そのための訓練も受けていないと認めつつも（本書七頁）、取り組んだのがグノーシス主義への論駁であった。彼らがグノーシス主義者と呼ばれるのは、次のように主張したことにある。「言葉で表現することも目でみることもできない力に関する奥義を、可視的で朽ちゆく事物を使って仕上げようとどと思つてはならない。また、「人間の思考では」考えることもできない非身体的なるものを、感覚と身体的なものを使って仕上げようとどと思つてはならない。口にはできないほど偉大なものについての認識（エピグノーシス）こそが、完全なる『解放（アポリュトロシス）』なのである。……それは身体的なものではない。なぜなら、身体は朽ちゆくものだからである。それは心魂的なものでもない。なぜなら、心魂もまた欠乏から生じたものであつて、言わば霊（プネウマ）のための住処にすぎないからである。それゆえ、『解放（リユトロシス）』もまた霊的なものでなければならぬ。なぜなら、内なる霊的な人も認識（グノーシス）によって解放されるのだからである」（本

書九二頁）。

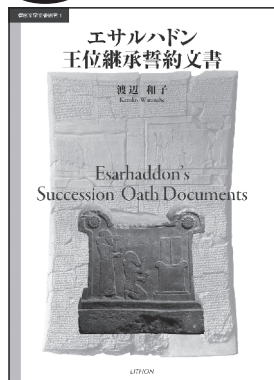
こうして、彼らは壮大な創造神話と救済神話を展開することになる。これは受肉、十字架の死と復活による救い、水を通して、あるいはパンとぶどう酒を用いて行われるサクラメントが否定されることであつた。教会が受け継いだ使徒たちの使信は、天と地とすべてのものの創造主、全能の父なる唯一の神、その神の子が「私たちの救いのために肉となられ」、「処女から生まれ、苦しみを受けたが、死人の間から甦り、肉体を具えたまま天に受け容れられた」こと（本書四六―四七頁）にあるのではなかったか。救いはどこから来るのか。ここにキリスト教信仰の真理を考察する神学的な営みが生ずることになった。それを展開したのが本書である。まさしく、エイレナイオスが「教会の最初の大神学者」（教皇ベネディクト十六世）と呼ばれる所以である。

本書の翻訳がこの巻から小林稔師から大貫隆氏に代わっている。筆者が小林師と最初に出会ったのはネメシエギ師のもとのオリゲネスの『雅歌講話』を用いたゼミでのことであつた。その後、同じカトリック者とはいえないエズス会とフランシスコ会と別々の修道会に属したこともあつて、顔を合わせるのはいく稀なことであつた。そうこうするうちに体調を崩し病魔と苦闘されているとの噂を聞くようになり、ついに亡くなられたとの報を受けた。二〇一四年一〇月のことであつた。残りの翻訳は残されていないかたそうである。未完で終わるのかと残念に思っていたところ、今回大貫氏というこれ以上の適材は考えられない後継者が現れたことを心から嬉しく思っている。

（おだか・たけし＝聖アントニオ神学院教授）
（A5判・二〇〇頁・本体三四〇〇円＋税・教文館）



新刊



エサルハドン 王位継承誓約文書

渡辺和子 著

●A4判上製 本体6,400円＋税

前672年にアッシリア王エサルハドンによって大量発行・配布された『エサルハドン王位継承誓約文書』は、粘土板に楔形文字のアッカド語で刻まれている。それは、多様な文化的背景をもつ人々を擁する大帝国内となったアッシリアにおいて、最高神アッシュル以下「全世界」の神々の前でアッシリア内外の要人たちに、次の王（皇太子）への忠誠を誓わせた誓約文書であった。本書は、近年トルコで発見された一つの新文書を含むテキストの再編纂・構成と文法の解明、全文の本邦初訳を含む。さらに本文の新しい解釈に基づいて、ユダ王ヨシヤの改革及び「申命記」、そして宗教史に与えた影響の可能性について論じる。

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

平和は可能であることの力強いメッセージ
マルゴット・ケースマン／コンスタンティン・ヴェツカー著
木戸衛一訳

なぜ〈平和主義〉にこだわるのか

命や環境、共同体の危機が叫ばれて久しい。グローバル化のもと貧困・格差はますます拡大し、人々の間の溝や分断が深まっている。第二次世界大戦の侵略国であるがゆえに、戦後一貫して倫理的責任を負い続けてきたドイツでさえ、いまや戦闘行為や武器の輸出が容認され、平和主義を軽蔑する声が増えてきている。こうした危機的な流れに一石を投ずるべく編まれたのが本書である。

ドイツで生まれたこの平和テキストの原題〈ENTRÜSTET EUCH〉には、世界でいま起っていることに憤激し、そこから意識を逸らされるな！／武器・軍備を解除せよ！という二重の意味がある。武器や軍事による国際貢献や安全保障体制ではなく、長き良き伝統である平和主義こそが急務であると、本書は強く訴える。

第一章は、二人の平和主義者による対談である。その一人、マルゴット・ケースマンは、ドイツ・プロテスタント教会のみならずエキュメニカル運動の第一線で長年活躍する牧師・神学者で、目下、宗教改革事業特命大使として世界各地を訪問して



岡田 仁

いる。その飾らない人柄と群を抜く行動力は多くの人々を惹きつけてやまない。相方のコンスタンティン・ヴェツカーは、ドイツを代表する音楽家・俳優・作家で、音楽活動を通じて差別や排外、戦争に抗い続けている異色のアーティストである（第三章「ヴェツカーの平和の歌」）。この白熱対談をとおして、読者は、対話のもつ豊かさとともに平和の可能性や勇気を確かに受けとるであろう。

ケースマンは問う。「私たちはいつも『最後の手段』、つまり武力のことばかり話して、『最初の手段』（平和主義の声）については沈黙しています」（二六六頁）。

平和主義は、「平和」と「つくる」からなる語（二八六頁）であるが、彼女にとってそれはどこまでも非暴力の態度であり、イエス・キリストがその中心的模範なのである。さらに、信仰の経験可能性としての靈性に触れ、歌うことや音楽がプロテスタントにとって非常に重要であると提言する（六七頁）。

ケースマンが初めて日本を訪問したのは、沖縄での平和会議に出席するためであった。この島の平和運動と出会った彼女は

激しく心を動かされたという。沖縄の基地の前では平和を求める祈りと歌が毎週捧げられ、「本土」各地にもゴスペル運動は広がっている。きょうも沖縄、広島、長崎、水俣、福島から〈ENTRÜSTET EUCH〉が発信されている。平和の主イエスに信従する共同体に求められているのは、苦しみの中におかれている民衆の靈性に呼応することではないだろうか。

第二章の「平和のための古典的なテキスト」（ズットナー、キング牧師など）は、古さをまったく感じさせないばかりか、いずれも刺激的かつ新鮮で挑戦的なメッセージである。

第四章の「平和のための新しいテキスト」では、聖書における暴力・非暴力、平和運動の実例が数多く紹介されており、読者はここにきて自らがすでに「変化」のきっかけになり始めていることに気づかされるはずである。平和は可能であり、私たちは武装を解除することができる。

「エキュメニカル運動は、戦争を行い、拷問、苦悩、暴行を携える軍隊を断罪しなければなりません」（一四五頁）。

「人間が平和の能力を持っているという希望を失いたくはありません。平和を実現する者になりましょう。それが私にとつての最初の手段です。そしてそれは、まさに宗教者の課題であり続けます」（二五〇頁）。

教会や神学へのチャレンジであるこのテキストを、日本のコンテキスト（文脈）においていかに共有するかが大切であろう。そのためには世界の現実と歴史の真実から目をそむけてはならない。本書が、宗派や世代を超えて読み継がれ、平和の地図が世界に広がることを願ってやまない。平和を創りだすために日々祈り、行動するすべての人にぜひ読んでいただきたい一書である。

最後に、分かりやすい日本語の翻訳をはじめ、「訳者あとがき」においてドイツの歴史や情勢など、じつに丁寧な解説を付してくださった木戸衛一氏に心から感謝を申し述べたい。

（おかだ・ひとし＝富坂キリスト教センター総主事）
（四六判・二六四頁・本体一五〇〇円＋税・いのちのことば社）

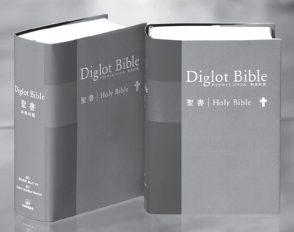
新しい 和英対照聖書が できました。

日本語訳と英語訳の
理想的組み合わせ

総ルビ 和英対照聖書

ダイグロット バイブル

Diglot Bible ダイグロット…
「2ヶ国語版」の意



聖書
新共同訳
総ルビ

English
Standard
Version

- 欽定訳の伝統を引き継ぐ、
原典に忠実かつ格調が高い
全世界で急速に愛読者が増えている、
必読の英語訳「ESV」
- カトリックとプロテスタント諸教会、
全国のミッションスクールで、
圧倒的シェアを誇る「聖書 新共同訳」

●B6判 ●旧新約・3,120頁
●本文：約8ポイント ●総ルビ
●巻末カラー地図（日本語英語各7葉）つき
定価（本体6,300円＋税）

NIESV54DI ピンク
ISBN978-4-8202-1334-5

NIESV54DI ブルー
ISBN978-4-8202-1335-2

お求めはお近くの書店または

JBS 日本聖書協会
〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 聖書館ビル
TEL03-3567-1987 <http://www.bible.or.jp/>

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrifkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 教館センター・17F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区銀座4-5-1 千葉中央ビル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.kyobunkwan.co.jp	keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書局	350-1331	埼玉県狭山市新狭山1-5-1	042-900-2771	042-900-2722		seikoshoten@bible.or.jp	
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www7.biglobe.ne.jp/~yodan-cbs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612		info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		kiordan@nbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://osakadocs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびばら	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-jbs@bible.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	共用			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一丁目1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.geocities.jp/natsujana_1007/index.htm	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	903-0207	沖縄県西原町字線777 沖縄キリスト教院内	098-943-7221	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

本屋さんを選んだ お勧めの本

『結婚と家族の絆』

長島 正・長島世津子著



2,700円+税
教文館

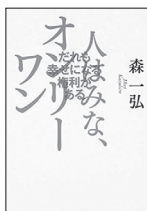
恵泉書房

関

達夫

『人はみな、 オンリーワン』

森 一弘著



1,300円+税
女子パウロ会

子育てと介護は共通点が多いと思います。子育てのヒントが介護にあり、介護のヒントが子育てにある。ですから子育てでも介護も大切な時期ではないでしょうか。「結婚は面倒だからしない」という若者が増え、テレビや週刊誌では不倫、離婚の話題に事欠きません。

そのような風潮と経済的な理由で、結婚したくない、結婚したくてもできない若者が増えています。だからこそ、キリスト教人間学の視点から、若い世代を長年指導してきた著者夫妻による現代的・実践的な考察が書かれている本書は、「これから結婚生活を迎える方々、その指導にかかわる方々、家庭に苦しみ方々に是非とも読んでもらいたい」(英隆一郎司祭)「お勧めの一冊です」。

「自分のものさしで計って『あの人は不幸』と決めつけてしまうことは、『いのち』の奥深さを知らない者の思い上がり以外の何物でもない。」「はじめに」より。

「幸せになる権利のこと」から、家族、お金、社会等々、困難な人生に傷ついて誰にも相談できないような問題に対して、著者ならではのわかりやすく、簡潔な文章によって、生きていて本当によかったと思える回答を与えてくれます。

5月には、「2017年キリスト教本屋大賞」ノミネート作品が決まり、大賞に向けての投票が始まりますが、「本はみな、オンリーワン」です。

恵泉書房

〒260-0021 千葉市中央区新宿2-8-2 千葉クリスチャンセンタービル2F
TEL: 043-238-1122
FAX: 043-247-3002
URL: http://www.keisenchris.jp
E-mail: keisen@vesta.ocn.ne.jp

編・著・訳者	書名	判型	頁	本体価格	版元	発行日
H.J.クラウク著 小河陽監訳	初期キリスト教の 宗教的背景上巻 —古代ギリシア・ ローマの宗教世界	A 5	354	5,000	日本キリスト 教団出版局	3／25
西田恵一郎・西田玄著	事実によって —福音の証言	四六	170	1,500	新教出版社	3／1
イヴリン・ア ンダーヒル著 金子麻里訳	内なる生	小B6	148	1,800	〃	3／1
『時の徴』同人編	日本基督教団戦争 責任告白から50年 —その神学的・教会的考察と資料	A 5	167	1,300	〃	3／1
三野和恵	文脈化するキリ スト教の軌跡— イギリス人宣教師と日本植 民地下の台湾基督長老教会	A 5	528	7,000	〃	3／20
日本クリスチャ ンアカデミー編 姜尚中・上山修平著	原子力発電と日 本社会の岐路 —聖書と共に考える混 成型共生社会と脱原発	四六	187	1,500	〃	3／30
木ノ脇悦郎	宗教改革の人間群像 —エラスムスの往復書簡から	四六	284	3,000	〃	3／31
山口里子	イエスの譬え話2 —いのちをかけて語り かけたメッセージは？	A 5	245	2,200	〃	3／31
稲山聖修	カール・バルトに おける神論研究 —神の愛の秘義をめぐる考察	A 5	200	2,000	キリスト新聞社	3／1
手束正昭	恩寵燦々と —聖霊論的自叙伝上巻	四六	400	2,000	〃	3／24
関西学院大学神学部編	平和の神との歩み 1945－2015年 —第50回神学セミナー	A 5	150	1,500	〃	3／31
三上章	ケンブリッジ・プラト ニストの哲学的霊性	A 5	489	4,000	リト ン	3／17
東洋英和女学院大 学死生学研究所編	死生学年報2017 —死から生への眼差し	A 5	335	2,500	〃	3／31
服部稔	マッチ棒の詩 死 で終わらない人生 —服部ますみの道程	新書	240	1,000	ヨ ベ ル	3／17
阪田寛夫	バルトと蕎麦の花	四六	112	1,800	一麦出版社	3／22

既刊案内（2017年2月～3月）（定価はすべて本体価格＋税）

編・著・訳者	書名	判型	頁	本体価格	版元	発行日
袴田康裕	改革教会の伝道と教会形成	四六	218	1,800	教文館	2／10
大塚野百合	受難と復活の賛 美歌ものがたり	四六	236	2,400	〃	2／25
梶原直美	オリゲネスの祈禱論 —『祈りについて』を中心に	A 5	332	4,500	〃	2／25
E.シュラー著 木村和良訳	イエスキリスト時代の ユダヤ民族史 V	A 5	432	9,500	〃	2／25
日本キリスト 教団出版局編	アレテイア 特別増刊号 見よ、この方を！ —今、復活と十字架をいかに語るか	B 5	128	1,852	日本キリスト 教団出版局	2／13
井上洋治著 山根道公編・解題 若松英輔解説	井上洋治著作選集7 まことの自分を生きる イエスへの旅	A 5	266	2,500	〃	2／20
フェイス・パウアーズ著 片山寛、加藤英治訳	知的障碍者と教会 —驚きを与える友人たち	四六	250	1,800	新教出版社	2／25
キリスト教年 鑑編集委員会	キリスト教年鑑2017	B 5	1326	15,000	キリスト新聞社	2／14
江川純一・久保田浩編	「呪縛」の呪縛 下巻	A 5	414	4,000	リ ト ン	2／28
小林永子	診察室の窓 II	四六	336	1,500	ヨ ベ ル	2／25
R. ランダウ編 野崎卓道訳	キリストは甦られた —20世紀レント・ イースター名説教集	四六	356	3,200	教文館	3／20
J. フェンネル著 宮野裕訳	ロシア中世教会史	A 5	388	5,000	〃	3／20
清水光雄	ウェスレー思想と近代 —神学・科学・哲学に問う	A 5	458	3,000	〃	3／30
小原克博・勝又悦子編	宗教と対話 —多文化共生社会の中で	四六	304	3,000	〃	3／30
樽松かほる・大島宏 ・高瀬幸恵ほか著	戦時下のキリス ト教主義学校	A 5	222	3,700	〃	3／30
W.H.ウィリモン著 上田好春訳	十字架上の七つ の言葉と出会う	四六	224	2,200	日本キリスト 教団出版局	3／10
片山はるひ・ 高山貞美編著	神のいづくしみ —苦しみあわれむ愛 2016年上智大学神学部 夏期神学講習会講演集	四六	170	1,800	〃	3／24

福音と世界

2017年6月号

特集 世界史の中で——宗教改革500年⑥

寄稿者 野々瀬浩司、クラウス・コシヨルケ、

深井智朗、伊勢田奈緒、蝶野立彦、

西川杉子

好評連載

台湾キリスト教史（高井ヘラー由紀）、

現代神学の冒険（芦名定道）、詩篇（月本昭男）、

第一モテ書（辻学）、レヴィナスの時間論（内

田樹）、アメリカの神学と教会のいま（吉松純、

みことば散歩（望月麻生）ほか

A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

編集室から

冬があけて梅雨入り前の、心地良い短い季節がやってきた。爽やかなのは嬉しいのだが、昆虫たちの活動も始まるかと思うと複雑な気持ちになる。

私は昆虫がとても苦手。エレベーターに乗って、目的の階のボタンが虫で塞がれていると、狭い空間でどうやって静かに移動してもらうかでパニックになる。そんな調子なので、学習帳メーカーが表紙写真に昆虫を採用しなくなったことが話題にされたときは、少なからず注目した。

子どもたちの「気持ち悪い」「怖い」という意見を取り入れたの決断だそうだが、私は自分のことを棚にあげて「そこまで拒絶しなくても……。」と思ってしまった。一応、例外もあるが、自身としては基本的に見る分には大丈夫。特に写真はこちらに飛んでくる可能性がないので安心して見ていられる。

突き詰めるところ、表紙が昆虫写真の学習帳は売れ残るので必然的選択なのだそう。子どもたちにいろんな虫を紹介したいと思っても、売れなければしかなかった。倉庫に在庫が積み上がっているようすは、私にも簡単に想像ができる。それは、とても辛い光景。物作りにおいて、提案と迎合のバランスの難しさを実感せずにはいられない。

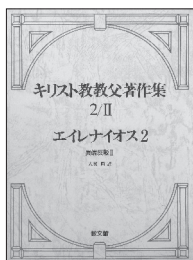
クリエイターって楽しいそうではないかと思っていたとき、牧師先生から、クリエイティブとは本来「無」から「有」を生み出すことだから、神さまにしかできない業だと説かれた。私たちは神さまが造った「有」と「有」を、センスよく組み合わせることが限界なのだと。

手話で「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」（創世記1・31）を表すとき、「良かった」は、その前の「すべて」を強調するために、四方八方へむけて何度も同じ動作を繰り返すそう。昆虫はきつと素晴らしいに違いない。そして少々前衛的な気もあるが、私もまた、クリエイティブのひとつなのだと思う。（吉崎）

本のひろば 2017年7月号 予告

本・批評と紹介…「時の徴」同人編『日本基督教団戦争責任告白から50年』、清水光雄著『ウェスレー思想と近代』、袴田康裕著『改革派教会の伝統と教会形成』、梶原直美著『オリゲネスの祈禱論』、J・フエンエル著『ロシア中世教会史』他

グノーシス主義研究の
基礎資料



**キリスト教
教父著作集2/1 エイレナイオス2**
エイレナイオス著 大貫隆訳
エイレナイオスの主著(全5巻)の第2巻。ヴァレンティヌス派などのグ
ノーシス諸派の教説に対して、その思弁の矛盾を論点ごとに論破し、精細な
内在的批判を加える。本邦初訳！

●A5判函入・226頁・本体4,000円

好評発売中
ルターの霊性思想
金子晴勇著

現代は、神と人間との関係が見失われ、良心が軽んじられ、霊性が瀕死
の危機にある。ルターの「霊性」思想を、長くヨーロッパの人間学の探究を
続けて来た著者が解明する。

●四六判・320頁・本体2,800円



宗教改革者たちの信仰
金子晴勇著

●四六判・268頁・本体2,000円
プロテスタンティズムの礎を築いたエラスム
ス、ルター、カルヴァン。彼らがオリゲネスや
アウグスティヌスから継承した、ヨーロッパ
史の「隠れた地下水脈」とは何か？ 神
学的議論のみならず、近代の思想・教育・
文化への影響にまで触れながら、宗教改
革の現代的意義を捉え直す。

宗教改革を知るために

はじめての宗教改革

G.S.サンシャイン著 出村彰／出村伸訳



イラストでよく神学入門シリーズ。ヨーロッパの近
代化の出発点となった「宗教改革」。教会内にと
どまらず、各地の政治・経済・社会に広く影響を
与えた運動の全体像を描き出し、現代的意義を
問う。

●四六判・348頁・本体2,400円

コシバクト・ヒストリー **宗教改革小史**

K.G.アツポルド著 徳善義和訳



中世から近代に至る、ヨーロッパのキリスト教化
というダイナミックな文脈の中で、ルターに始ま
り農民戦争や再洗礼派に至るまで、幅広く多様
な形で展開し、歴史に決定的な刻印を残した
「宗教改革運動」を見事に描いた斬新な入門書。

●四六判・340頁・本体1,800円



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549(出版部)
本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop教文館

日本で神学する

栗林輝夫セレクション1

栗林輝夫著／大宮有博・西原廉太〔編〕

5月25日

栗林輝夫の遺稿選集全2巻、いよいよ刊行開始。第1巻は、日本の文脈に現場に根ざして神学を営んだ著者の論考を精選。解放神学者としての田中正造論・賀川豊彦論から、ポスト・フクシマの神学まで。実践に固執した栗林神学がここにある。

◆A5判・本体3600円

ゴッホと「聖なるもの」

正田倫顕著

5月25日

見る者の魂を震わせるゴッホの作品。書簡と作品の徹底的な分析を通して、ゴッホとキリスト教の関係、また彼の宗教性の内実作品がはらむ「聖なるもの」の秘密を明らかにした俊英の力作。



◆A5判・本体2700円

神の和の神学へ向けて

宮平 望著

三位一体から三間一和の神論へ

日本から発信する神学！聖書が証言する神を、「間」と「和」という日本的な思考と感覚をととして表現し告白しようと試みる、新たな神学の冒険。

◆A5判・本体2400円



山上の説教から憲法九条へ

平和構築のキリスト教倫理

宮田光雄著

今日の国際情勢の中で、山上の説教によって平和をつくれるのか――。
「右の頬を打たれたら左の頬をも向けよ」「兵役拒否のキリスト教精神史」「近代日本のキリスト教非戦論」「非武装市民抵抗の構想」の4論文を収録。

◆B6変型判・本体1800円

大反響

ルター自伝

宗教改革 500 年記念復刊

藤田孫太郎編訳

好評

「卓上語録」から自伝的な文章を抜粋し、編訳者の詳細な解説を加える。ルターの激動の生涯と、福音的・改革者の信仰、そしてユーモアあふれる自由な人間性を生き生きと伝える。

◆新書判・本体1200円



定価七八円(税抜七二円)(¥62円)

一年分一三〇〇円(送料共)

一九五七年七月一日 第三種郵便物認可
二〇一七年六月一日発行(毎月一回発行)
本のひろば 第七三三号 二〇一七年六月号

発行所 〒162-0814 東京都新宿区新小川町九一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三三三六〇一五二〇 振替〇〇一七〇一五二一 一六七九
発行人 本村利春 編集人 土肥研一 印刷所 (株)平河工業社
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三三三六〇一五六七〇